

歴史的港湾施設の土木遺産評価に関する研究

～住民アンケート結果 10 年前との比較～

日本大学 学生員 ○十文字龍彦・遠山翔平

日本大学 正会員

伊東孝*

1. はじめに

「崖の上のポニョ」の海で知られる鵜港には、歴史的港湾施設の五点セットとよばれる雁木・常夜燈・波止・焚場・船番所がある。

本研究では、住民の人たちが、これら施設をどのように位置づけしているのかについてアンケート調査を行った（船番所は除いた）。またこのアンケート結果を、10 年前と比較し、住民意識の変化を探る。

2. 調査方法

アンケートは、鵜港に面している町を中心に約 446 軒に配布し、回答軒数は 156 軒(156 名)で回収率は 35%であった。回答者の男女比較は、男性 82 人(53%)・女性 74 人(47%)で、居住年数は 156 人の内 100 人(64%)が鵜地区に 40 年以上住んでいるという回答であった。（今回は紙面の都合上、男女の相違・居住年数による分析は掲載していない。）

配布は、平成 21 年 8 月 29 日(木)・30 日(金)の昼間に各家に直接行き、在宅の場合、手渡しして説明、不在の場合、ポストに投稿し、回収は、30 日(金)・31 日(土)の昼間におこなった。

質問内容は、10 年前の 1999 年に行われたアンケートと比較するため、同じ設問とした。10 年前の回収軒数は 140 軒(140 名)である。

3. 調査結果と考察

(1) 設問「鵜港を一番特徴づけている構造物は何ですか。雁木・常夜燈・波止・焚場・町並みから選んでください。」(図 1)

1) 2009 年

住民は、常夜燈(74 人、47%)・町並み(37 人、24%)・雁木(16 人、10%)・波止(5 人、3%)・焚場(4 人、3%)の順で特徴づけていることがわかった。また今回の質問では、一番特徴づけているものを聞いたので、複数回答は「無回答」として処理したため

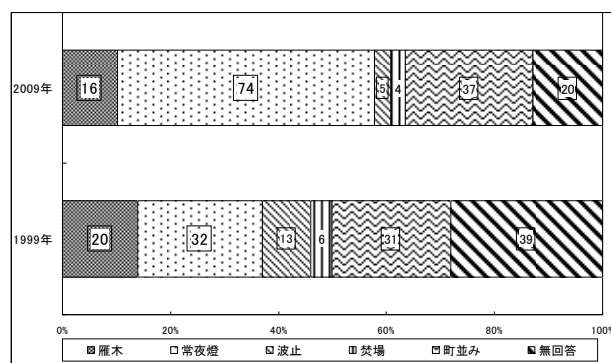


図 1 鵜港を一番特徴づけている構造物 (単位: 人)

13%(20 人)と比較的大きな値になってしまった。

2) 10 年前との比較：常夜燈・町並みは増えた

10 年前は常夜燈(32 人、23%)・町並み(31 人、22%)・雁木(20 人、14%)・波止(13 人、9%)・焚場(6 人、4%)・無回答(28%)という結果であった。常夜燈は倍増し、町並みは微増した。その分、雁木・波止・焚場は割をくって、低下している。

(2) 設問「雁木・常夜燈・波止・焚場それぞれに対し、愛着がありますか、誇りに思いますか」(図 2)

1) 2009 年

各項目に対し「愛着がある」「少しある」と答えたのは、常夜燈(83%)が一番多く、次いで雁木(67%)、波止(67%)、最も低い値が焚場(41%)であった。

また「誇りに思う」「少し誇りに思う」と答えたのは、常夜燈(70%)が同じく一番多く、次いで前述と同じく雁木(60%)、波止(62%)、焚場(46%)の順であった。「愛着がある」と答えた人は同じように「誇りに思いますか」という質問になっても「思う」と答えた人が多いことがわかった。

2) 10 年前との比較：「誇りに思う」が増加

10 年前は「愛着がありますか」の結果は、常夜燈(82%)、雁木(67%)、波止(67%)、焚場(32%)の順になり、数値も近かった。しかし、「誇りに思いますか」の質問では、常夜燈(22%・51%)、雁木(20%・39%)、

キーワード 鵜の浦、港湾施設、土木遺産、評価、崖の上のポニョ

連絡先 *〒274-8501 船橋市習志野 7-24-1 日本大学理工学部社会交通工学科 tel:047-469-5572 e-mail:itoh@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

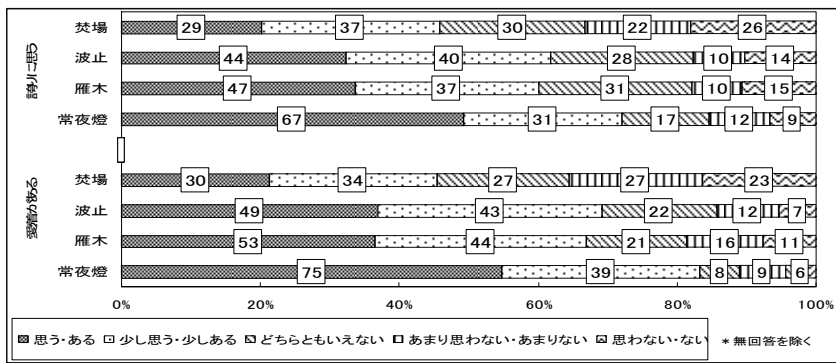


図2 港湾施設別愛着度・誇り度(2009年) (単位:人)

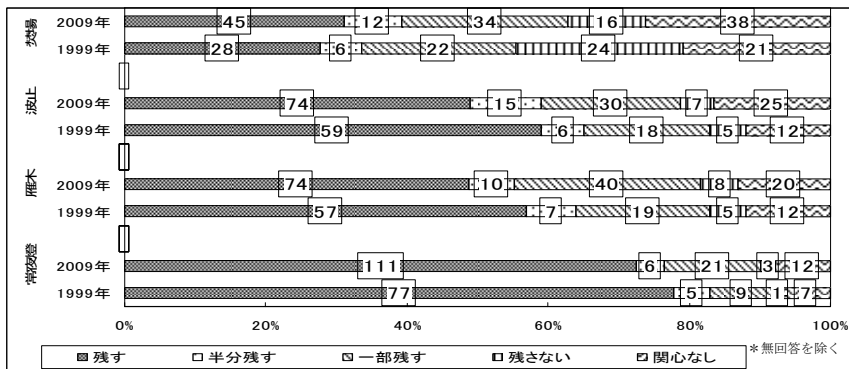


図3 港湾施設別保存意識 (単位:人)

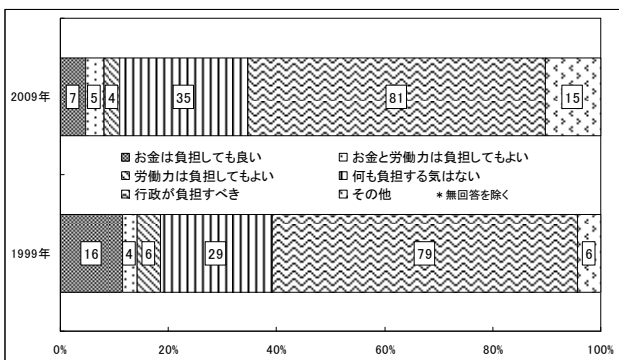


図5 雁木の補修のあり方 (単位:人)

波止(15%・37%)、焚場(8%・21%)という結果であった。10年前と比べ、「誇りに思う」と回答した人がすべての項目において増えており、意識の変化があったと推測される。(10年前のグラフは未掲載)

(3) 設問「雁木・常夜燈・波止・焚場に対し、今後保存するとすれば、どれくらいの規模を残したいと思いますか」(図3)

1) 2009年

「残す」「半分残す」「一部残す」を合わせて各項目ごとにみると、常夜燈(90%)、雁木(82%)、波止(79%)、焚場(63%)の順であった。結果として、すべての港湾施設に対して6割以上の人びとが保存意識をもっていることがわかる。

2) 10年前との比較: 焚場の保存意識が高まる

10年前は常夜燈(92%)、雁木(83%)、波止(83%)、焚場(55%)の順であった。常夜燈・雁木・波止はほとんど変化はないが、焚場の保存意識が高まった(8%)ことがわかる。

(4) 設問「コンクリートで覆われている雁木を、昔のように復元するには、お金がかかります。その負担の仕方はどうあるべきですか」(図4)

1) 2009年

「行政が負担すべきである」(55%)が一番多く、次いで「何も負担する気はない」(24%)、「その他」(10%)となった。

2) 10年前の比較: 「お金の負担」減少
10年前は「行政が負担すべきである」(57%)、次いで、「何も負担する

気はない」(21%)、「お金は負担してもよい」(10%)となっていた。大きく変わった点は「お金は負担してもよい」が半分以上に減り、「その他」(1999年: 4%)が2倍以上に増えた。この2点が大きく変わっている。瀬の浦の世界遺産が聞こえるようになって、かつてみられた自立精神は失われてしまったのであろうか。

4. まとめ

今回のアンケート調査と10年前との比較によって、以下のことが明らかになった。

- ①住民は10年前と比べ、常夜燈に対する意識が向上し、逆に雁木・波止・焚場の意識は低下した。
- ②住民は歴史的港湾施設に対し、「愛着」は10年前とあまり変わらず、「誇り」は高くなった。
- ③住民の焚場に対する保存意識が高まった。
- ④雁木の補修意識で金銭の負担は減ったが、何らかの形で負担する意識は変わらない。
- ⑤今回は自立精神の損失という住民の人たち、またわたしたちにとっても不本意な結果になった。データ数を増やして再度より慎重な調査をする必要があると思われる。

〈参考文献〉

- 1) 平成11年度 歴史的港湾施設の土木遺産の評価に関する基礎的研究その2～住民アンケート調査結果～: 尾上恵司 他8名